

国家の建設に邁進してきた。お陰で世界がうらやむような経済大国に成長した。一部には、行き過ぎた社会現象や問題も生じているが、大局的に見れば、平和あつてのものと言える。日本は、これからも戦争放棄を国是とし、世界平和のために、国際社会の中で先導的役割を果たしていくべきだと思つている。

清津・羅南から家族引揚げの記

静岡県 勝海 鋭朗

一 生い立ち

父は、大正時代に北朝鮮羅南の第十九師団騎兵第二十七連隊を特務曹長で現役除隊し、その後内地（日本）で土木請負業を始めたが、労働力である朝鮮人の暴動に巻き込まれ破産した。昭和五（一九三〇）年四月、兵隊仲間であつた羅南の知人を頼り、夜逃げ同様の姿で朝鮮に渡つた。当時の家族は、父母と兄二人姉一人の五人であつた。

羅南では、生駒町の貸家に居を構えた。古い陶器屋の裏あたり、道を挟んで前には履物屋があつた。当初は陸軍の射撃場の仕事を請負つていたそうで、「赤貧洗うがごとし」という表現そのままの貧乏な生活だったと、当時四歳半だった長兄が話していた。その後、二年という約束で騎兵連隊の馬の調教師となり、陸軍軍属として官舎に入っ

た。この官舎は、羅南川の中流右岸にあり、上流には陸軍の射撃場があった。さらにその近くには支那人の広い畑やリング園も点々とある、朝鮮人の部落も数多く点在していた。

官舎の南側には小高い丘があり、後ろが羅南護国神社の境内になっていた。その左奥には羅南神社と忠魂碑の広場があった。東側（羅南川左岸）には陸軍病院が見え、師団・旅団の司令部、歩兵第七十三及び七十六、騎兵第二十七、山砲第二十五の各連隊の兵舎があり、また官舎などの陸軍関係の建物が並んで遠くまで続いていた。

南には、街の外れまで朝鮮部落が続いていた。この部落は小学生の通学路になっていたが、通学の際、朝鮮人から暴言を吐かれるやら、石を投げられたり、追いかけられたりする危険がいっぱいだった。中には「やめろ！」と庇ってくれた朝鮮人もいたが、いろいろと迫害を受けた。衛生観念も乏しく、道路上に洗い物の水をまき散らしたりするので、夏には異臭を放ち、冬には食べ物のか

すなどが路上に凍りつき、危なくて歩けなかった。支那人の主な仕事は、料理店、農業、豆腐店などで、朝鮮人は公務員、運転手、店員、労働その他各種の職業に就いていた。

私は、このような四囲の環境にあった羅南の陸軍官舎で、昭和六年七月十三日に生まれた。この年の九月には満州事変が始まった。

二年という約束なので、父は昭和八年九月の末には調教師を辞めて、本業の土木請負業の仕事に入った。兄二人は足手まといになるためか、母の生まれ故郷である温泉の町、静岡県伊豆長岡町に帰されて、そこで学校に通うことになった。長兄は二年生、次兄は一年生であった。私は姉と共に豆満江の右岸、鉦山の街、茂山に移住した。父の仕事は道路の建設工事だった。茂山の記憶はあまりないが、朝鮮人が夜遅くまで手足を振って、踊りながら騒いでいたのを覚えている。

やがて茂山の工事も終わり、昭和十一年四月、再び羅南に戻った。父の仕事がうまくいったのか、

羅南では大きな家を購入した。伊豆長岡にいた兄二人も、母が迎えに行き戻って来た。このとき、私は母に付いて行き初めて日本の地に足を踏み入れた。

ここ羅南生駒町の家の前は中村雜貨店、道を挟んで中華店があり、住み良い所だった。

隣家のお茶目な女の子に引きずられ、幼稚園に遊びに行った。初めのうちは先生が「この子は見たことのない子だが、どこの子かな？」と女の子に聞いていたが、いつの間にか一日中幼稚園で過ごすようになった。うちの家計も余裕ができていたのか、そのうちに母は私が幼稚園に入ることを許してくれた。

支那人は野菜を車に乗せて売りに来るが、朝鮮人のオモニは海産物を頭に載せ、「サオー」と掛け声をかけて売り歩いていた。知人の朝鮮人の娘さんに、家の掃除や洗濯を頼んだ。そのころには私の家族も妹や弟が増えて、九人の大家族になっていた。食事のときなどはまるで戦争のようで、

兄弟喧嘩も絶えない賑やかな家庭であった。

昭和十三年四月、羅南小学校に入学した。朝鮮人の子供は、日本人とは別の普通学校に入ることになっていたが、親日家の子供なのか、または家庭が裕福なのか、私のクラスには朝鮮の子が二、三人いた。

通学には羅南橋を渡ったが、川の水が少ないときは川を渡って近道をした。羅南の冬は厳しく寒いが、雪の中、ソリやスキー、スケートに夢中になり、夜遅くまで遊んだ。春になると兄たちと師団の山を越え、羅北川に魚釣りに出掛けたりした。前年七月に支那事変が始まっていたので、戦地の兵隊さんに慰問袋を送ったりもした。

いつの間にか、長兄は京城（ソウル）の学校に行ってしまった、次兄は羅南中学に、姉は羅南女学校に通学を始めていた。昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まり、世の中は戦時体制一色になり、師団司令部のある羅南は軍人であふれ、民家にも兵隊さんが宿泊するようになり、まさに軍都

となった。学校でも軍事教練が活発になった。

昭和十九年四月、清津師範学校に入った。鉄道、バス等乗り継いで通学なので、朝早く家を出なくてはならない。京城の学校を卒業した長兄は、いつの間にか羅南郵便局に勤めていた。丸一日勤務して翌日一日は休みという勤務で、休みの日は空気銃を手に朝から出掛け、いつも二十羽ぐらい腰にぶら下げて帰って来た。「丸玉と三角玉はカンプしてしまうので命中率が悪い、堤玉が一番だ」と言っていたのを聞いた覚えがある。朝鮮の雀はとろいのかも知れない。カメラも、兄たち二人で共謀して親父からせしめていた。清津のカメラ店で購入、六×六のいわゆるシックス判だったが、そのうちに気に入らなくなり、親戚の将校に頼み偕行社でミノルタを購入してもらい、夢中になって撮っていた。挙げ句の果てに暗室まで造り、現像から焼き付け、引き伸ばしまでやっていた。姉は、この将校が週番で部隊に泊まる時には、奥さん一人では夜が怖いからと、官舎に泊まりに

出掛けていた。

昭和十五年ころから護国神社建設の話が出て、昭和十六年、同時に忠霊塔建設工事も始まった。父はこの仕事を道庁から直接受注していたし、ほかにも吉州の灌漑工事を手がけ、終戦まで続いた。父は町内会長を引き受けていたが、朝鮮人が多い陋巷の町内では隅々まで手が届かなかったので、家の近くに事務所を設けて、朝鮮の女性を雇い仕事を任せていたが、配給や割り当て物には頭を痛めていた。特に、当時割り当てられていた戦時債券を、朝鮮人に購入させることは無理だったので、父がすべてかぶっていたようだ。

昭和十九年十月、長兄は師団通信隊に現地入隊した。通信は商売柄だから心配はない。次兄は、羅南中学卒業後東京の大学に入って、上京してしまった。姉は羅南女学校四年生のとき、動員で師団通信隊に通っていた。そして私の下にはいつの間にか弟が二人、妹が三人となっていた。長兄は知らない間に衛生兵となり、陸軍病院で教育を受

けていて帰りには家に寄って、いろいろな物を持って行った。父は「あいつはよく家にいるなあ！大丈夫かな？」と心配していたが、そのうちに星が二つになった。

昭和二十年の四、五月ごろになると、戦況がおかしくなってきた。兄は「師団の高級将校が、敗戦が近いとつぶやいていた」ということを父に話していた。本当にどうなってしまうのだろうか、心配になっていた。

二 放浪、避難の旅（羅南→咸興）

昭和二十年八月十二日の夜、邑事務所から日本人は避難するようという知らせがあった。父は急いで朝鮮の使用人に連絡して、牛車を一台準備するよう頼んでいた。翌十三日早朝、学校に出掛けようとしたら、「どこへ行くのだ、逃げる支度を手伝え」と父に怒鳴られた。姉は、たまたま風邪引きで休んでいた。

それからが大変だった。父は道庁に出掛け、工事の中間払いの代金を小切手でもらったが、既に

銀行は閉鎖されており、換金できなかった。金額は八万円とか言っていた。

十四日、朝鮮人が六人ほど手伝いに来てくれて、牛車に食糧や衣類その他を積み込み、昼ごろ出発した。どこを目指すのか、父の考えもまとまっていなかったらしい。朝鮮人が「朱乙の山奥に親戚がいるから、そこまで行きましょう」と歩き始めた。羅赤嶺を越え、鏡城を通り朱乙まで来たが、父が「奥に入ってしまうと情報がつかめない、吉州まで汽車で南下しよう！」と決心し、荷物は朝鮮人に預け、お礼に幾ばくかのお金を渡した。私も持っていた兄のカメラをお礼に差し出したが、「使い方も分からないから困る」と困惑していた。お金に替えても良いからと無理やり渡した。

リュックサックに各人に分配された食糧、衣類等を詰め込んで、朱乙駅から汽車に乗ったが、車内は大変な混雑で、ごった返していた。吉州に着き、以前吉州の灌漑工事のときに父が利用していた駅前の富士屋旅館で休息、父はそのときに玉音

放送を聴いたようだ。

終戦を知ったのは八月十五日か、十六日か、今になると定かでないが、父は富士屋旅館に一泊することにした。旅館でも羅南からの避難者や、羅南郵便局の職員たちもいて、混雑を極めていた。彼らは恵山鎮に行くとのことで、私たちにも誘いがあったが、父は道庁に未練があったのでその誘いを断り、家族のほかに富士屋のおばあさんと娘さん、それに西条さんという人を連れて、道庁が存在していると聞いた平壤（ピョンヤン）に向かった。

汽車の中は、日本人を威嚇する朝鮮人の暴言が飛び交って、騒然としていた。夜になると方々で火の手が上がり、騒然としている朝鮮人たちを一層鼓舞しているようだった。そんな中、列車は平壤に近付いていた。しかし、平壤は日本人の避難民でいっぱいであることができないので、仕方なく引き返すことになった。父は羅南に帰りたかったようだが、羅南方向に向かう汽車が無く、咸興

に向かった。

咸興の駅も避難民でいっぱい、どこに行ってもいいのかわからない。取りあえず、咸興小学校に避難して、そこで生活を始めた。ソ連兵の略奪、暴行、強姦。これにはみんな参ってしまい、怒りが頭にのぼってしまった。父が姉に「この姿では危険だから、髪の毛を切りなさい」と諭したが、姉は言うことを聞かなかった。気の強い姉だったので、結局は日本に帰り着くまでとうとう髪の毛は切らずじまいだった。ソ連兵が来ると、みんなで大声を出したり、一斗缶を叩いたりして、隠れている姉の所に近付かせずに守っていた。

このころから、父は避難民の世話を焼くようになっていた。ある日、父が咸興武徳殿での打ち合わせを終わって外に出ると、長兄がそこに立っていた。びっくりして事情を聞くと、兄の部隊は吉州でソ連軍の戦車隊に遭遇し、そのまま山の中に逃げ込んだ。その後山中をさ迷い、端川に出て、そこから鉄道線路を伝って咸興にたどり着いたと

のこと。ぶらぶらと街中を歩いていたときに、羅南の家の裏に住んでいた中川のおばさんに出会った。おばさんに「お父さんは武徳殿の裏で打ち合わせをしていますよ」と教えられ、武徳殿での打ち合わせが終わるのを待っていたということであった。父は「長男を拾ってきた！」と言って皆に紹介していたが、喜びを隠せなかった。

朝鮮人は避難所になっている学校まで食べ物を売りに来た。母は食糧を買いあさっていた。ある日、弁当箱いっぱいウニを買って来たことを覚えていた。北朝鮮はウニ、明太子、筋子などの特産地で当時でもたくさん採れ、値段も安かった。このときの弁当箱は、今でも大事に持っている。毎日、何を食べていたのかはっきりした記憶はないが、母が大きな鍋で雑炊を作っていたのを見ている。

三 日本に帰れる希望を持って！

(咸興〜鉄原〜元山)

九月の初めか中旬のころに、日本に帰る汽車が

出るといふ知らせがあった。みんなは、咸興駅に集合した。それぞれいろんな姿で並んでいたが、汽車はなかなか来なかった。ソ連軍の将校がジープに乗って来たりしていた。やっと到着した列車に乗り込むことができたが、無蓋車だった。日本に帰ることができると思えば、少しばかりの苦労は辛抱できた。

高原、元山を過ぎ、やがて鉄原に停まった。そこで鉄原のソ連軍駐屯司令とのやりとりがあった。そんなことで、三日間ぐらい鉄原駅のホームで留め置かれた。その間に逃げ出す人も出てきた。何千人という人が何日間もいると、ゴミの山ができた。特にトイレには参ってしまった。どこに行ってもフンの山ばかりで、気分の悪くなる人も多数出てきた。兄は、兵隊仲間らしい友人三人と何か相談していた。駐屯司令との交渉がうまくいかず、咸興へ引き返すことになった。引き返す途中の列車から飛び降りて、逃走する人も少なからず出たが、我が家では子供が大勢いるのでそんなことは

できず、ただ見ているばかりであった。

汽車はやがて元山駅に停車した。西条さんの機知で、元山のお花の先生が駅まで迎えに来てくれた。元山の泉町葬儀屋の二階を借りて、しばらくそこで生活することになった。保安隊の臨検も、何度となく受けた。一階に避難していた、関東軍の兵士三人のうち二人が連行された。一人は銭湯に行っていて難を免れ、慌ててどこかに逃げて行った。兄もちょっと危なかったが、尋問されたとき、父は家族の一員だと頑張って助かった。富士屋のおばあさんと娘さんとも、ここまでは一緒にいた。葬儀屋の前にお寺があつて、そこにも避難民が大勢いた。窓から覗くと、顔はすすけ真っ黒で、ぼろぼろの衣服を着ていた。境内に竈かまどを作り、煮炊きをしていた。ここでは死人もたくさん出ていたようであった。遺体は藁に包み荷車で運んでいた。見るに忍びない悲惨の極みだった。我々の食卓も寂しくなってきた。母は苦労していた。ジャガイモを入れた雑炊が多くなってきた。

四 安辺、元山での年越し

世話会の指示により、安辺の元の海軍工廠に移った。工廠は大部分が破壊されており、豊などは皆無であったが、それなりにみんな協力して手を加えてどうにか住めるようにした。ちょうど稲刈りの時期であつたので、朝鮮人農家に稲刈り作業に出掛けた。一日五合の米をもらう約束で何日も働いた。長兄は子供のときの経験があつて、稲刈りは巧いものだった。朝鮮の年寄りや子供は、日本人が働いているのが珍しいのか、一日中見物していた。見られている我々は、少々惨めさを感じ面白くなかつた。

そのころ父が保安隊に連行されて、何日も帰って来ないので、心配したことがあつた。寒くなってきたので、母から「オーバーを持って行ってあげなさい」と言われたので、私が出掛けた。保安隊に行くと、父は何もされていなかったが、一緒に連行された一人は大分痛めつけられていたようだった。父のオーバーのポケットから、工事の取

引相手、朱乙木材会社の領収書が出てきた。これだけが役に立ったわけではないだろうが、父はすぐに釈放された。出て来た父は、小声で「今一人の秋山さんは元警察官だ。心配だな。憲兵、警察官は憎まれていたから、だれかが密告したのかもしれない」と話した。

再び元山に戻り、今度は泉町の小山にある忠魂碑の下の一軒家に入った。ぼろぼろな汚い家だったが、贅沢は言っておられない。ここにもソ連兵がまた来たそうだった。玄関は板で頑丈に釘付けた。父は、世話会の役員会とかで出掛けた。兄は、ソ連軍が日本軍から得た、戦利品を船に積み込む作業で、徹夜が多かった。私は朝鮮人の経営する蒲鉾屋に勤め、朝食は家で、昼食と夕食は店で食べていた。姉とすぐの妹は「五月」という割烹料理店に勤め、住み込みだった。下の妹は元山の北、高原にある農家の子守に行っていた。

この朝鮮人一家は親戚同士で、親日家でもあった。我が家族は、この朝鮮一家に助けられていた

のだった。私たちが無事に日本に帰れることができたのは、この人たちが助けてくれたお陰である。できるならば感謝の気持ちを伝えたいと、今でも思っている。

元山世話会事務所の前に、日本人経営の割烹料理店があったが、そこにも避難民が大勢生活していた。見るも哀れな状態だった。顔は真っ黒に煤けていて、腰には空き缶をぶら下げ、何を煮ているのか分からないが、腰をかがめて火を見つめている姿を見た。ある時期からやっとソ連軍からの米の支給があり、我が家も助かった。避難民の人々も、これでやっと命をつないだのではないだろうか。我が家ではよそで食事をする姉妹がいたので、米は余っていた。母は、これをお金に換えていたようだった。

日がたつにつれて、ここでの主食にも高粱が混じるようになってきた。母は、高粱は消化が悪いからよく噛みなさい、とみんなによく注意していた。私は朝食だけ食べていた。

ソ連軍の兵隊を身近で見えるようになったのは、ここへ来てからだ。何といろいろな人種がいるものだと感心した。髪の毛は白、赤、黒と種々雑多だ。汚れた服を平気で着ていて、衛生観念もゼロのようだ。囚人だった者も混じっていると聞いた。十六歳ぐらいの若い兵士もいた。ロシアの黒パンをもらったこともあった。このパンは初めは酸っぱいと思ったが、慣れてくると案外おいしいものだった。羅南で同級生だった友達が訪ねて来たこともあった。羅南の映画館「初瀬座」前の料理店「咸一館」の息子で、父が朝鮮人、母が日本人だった。市場に遊びに行ったり、海水浴に行ったりしたものだった。この友達が、その後どうなったのかは分からない。

五 元山で父が他界し、母が出産する。

元山で昭和二十一年の正月を迎えた。おせち料理は何ともささやかなものだった。相変わらず父は世話会に、兄は港でソ連軍の戦利品の積み込み作業、私は蒲鉾屋で働いていた。蒲鉾屋では、原

料の鱈の頭を避難民に売っていた。一個一円。自分もそうだが貧しい服装をした日本人避難民は、店の主人も分かっていたようだ。ときどき鱈の頭のほかに、ハンペンとか揚げ物を、そつと無料で渡していた。

父が病にかかった。病名は発疹チフスだった。この病は虱しゅみが媒介する伝染病だ。避難民の中でも大勢の人がかかったが、特に老人や子供は抵抗力がないので、かかるとすぐに亡くなってしまった。父も高熱を出してふせていた。兄は軍隊時代は通信隊の衛生兵だったので、多少の経験を生かし、どこからか強心剤のカンフルを手に入れ、打っていた。あるとき、母に「どうもいけないかもしれない、液を受け付けてくれないので漏れてしまふ」と話していた。

昭和二十一年二月四日の朝、父は息を引き取った。享年五十歳であった。人生五十年、苦勞して築き上げた家と財産を無くした上に、こんなに早く死ぬなどとは思ってもいなかったのではないか。

誠に残念で、口惜しく悲しかった。涙がいつまでも止まらない。特に長兄は父との関係が長いので、父の心境が一番分かっていた。葬儀など、どうすればよいのか迷っていたようだ。家族も途方にくれた。

日本人の遺体は、菰か吠に包んで山に埋めていた。

近所の松井さんが、母に「日本に帰ってから必ず後悔する。私が葬儀屋に話を付ける。責任も取るから、火葬にして遺骨を持って帰りなさい」と、強く言われた。母はその言葉に励まされ、火葬に踏み切った。父は、松井さんとは羅南当時に何らかの関係があつて、親しくしていたようだった。工面したお金と、各方面からの援助のお金を加えて火葬料に充てた。翌日は、小雪のぼらつく寒い日だった。葬儀屋の大八車に棺桶を乗せ、兄が後ろから押して火葬場に向かった。大分たつて、父はお骨になって帰って来た。家族全員で父の骨箱を涙ながらに迎えた。その当時は、火葬にすると

いうことは大変なことで、多くの人たちはみんな山にそのまま埋められていた。悲しい話であった。その後、兄も発疹チフスにかかって高熱を出した。髪の毛が真っ赤になり、トイレに行くときなど、四つんばいではって行つた。情けない姿だった。しかし兄は若かつたので、その後幸いに回復した。

昭和二十一年三月、母は女の子を出産した。父親を亡くした翌月のことだった。避難先のことなので驚き、私たちはどうして良いか分からずに右往左往してしまつた。姉が、懸命に母の指示を受けて動いていた。私たちは、姉の言うことを聞くしかなかつた。「釜いっぱいにお湯を沸かして！」という姉の声を聞いて、すぐにそうした。お産など、男には分からないことが多かつた。

母は強かつた。無事に女の子を出産し、翌日にはもう起き上がっていた。赤ん坊はその後順調に育っていたが、ある日病名は分からないが体調を崩し、元山陸軍病院に入院した。母は懸命に看護

にあたり、家と病院を往復していた。看護の甲斐があつて、赤ん坊は無事に退院できた。母は懸命にその赤ん坊の食事に気を付けていた。そのため小さいながらも健康に育っていた。ソ連軍は、本国に輸送する戦利品が無くなったのか、港での作業を中止した。そのため兄の仕事も無くなって、内職を始めた。煙草の葉っぱをどこからか持って来て、母に葉の刻みを頼んだ。兄は、ソ連軍の作業に行っているときに、煙草の巻紙をかすめてきていた。直径六十センチメートルもあるロール巻で、タバコ工場で使用していたものらしかった。母が刻んだ葉をその紙で巻き十本ずつ束ね、一束十円で高原にいる妹に売らせた。妹は初日に一束売れたのが嬉しかったのか、すぐ家に帰って知らせ、また売りに出掛けた。

兄の兵隊仲間が尋ねて来た。同じ隊の同じ内務班で、寝起きを共にしていた兵長だった。逃亡中に子供を抱えた夫人と知り合い、同伴していた。非常事態のとき、どんなことが起きてもおかしく

ないが、随分と苦勞を重ねてきたようだった。またソ連軍の作業中に知り合ったのか、いろいろな人が尋ねて見えた。元山の居住民の方も見えた。お互い情報を話し合っていたようだった。

六 三十八度線に向かつて南下

話が前後してしまつたが、高原で働いていた妹が朝鮮の小母（オモニ）さんと一緒に、いろいろな食べ物を山のように抱えて帰って来た。オモニから「この子を置いて行ってくれないか、自分の子のようにして大切に育てるから、お願いしまし」と言われて、みんなはお互い顔を見合わせてしまつた。母は、この話には特に参つていたようだった。この朝鮮人一家には大変に世話になつた恩があるので、母は一時困惑したが、それこそ丁重にお断りしていた。もし、このとき妹を置いてきていたら、一生悔いが残つたと思う。だれの責任か、今でもこのときのことを思い出すと、寒気を感じる。

三十八度線を越える話が、また家族の中で始ま

った。汽車か、船か、山越えか。山越えは駄目だ。小さい子を連れて歩けるわけがない。兄が「朝鮮人の迫害がある。なるべく歩くのは避けた方がよい。汽車でも歩く場所がある。そこが心配だ。船も、よく分からないが騙す朝鮮人がいるとの話もある。そればかりではないが、どちらにしても三十八度線を越えなければ日本には帰れない！」と言った。ときどき顔を見せる朝鮮の知人がこの話を聞き、「汽車の切符は私がかできます」と申し出てくれた。これで汽車に決まったが、当時は、日本人の若い男はシベリアに抑留するという話が巷に流れていた。兄は「今は危険だ。若者はソ連に連れて行かれる。朝鮮人の話は本当かどうか分からない」と言っていた。

そんなとき、兄の友達が尋ねて来た。そして、「我々四人で山越えしないか。どうもこのままでは若い者はソ連に抑留されそうだ」と言う。友達を説得し、同意を得ようとしていた。母もどうすればよいか決心が付かないでいた。兄は友達

に「俺が家族と一緒に汽車で行くと、危険が多いようだ。女、子供たちだけの方が、かえって安全かもしれない。しかし君たちと同行した場合、いろいろと経費がかかると思う。君たちが全部負担してくれるなら考える」と返事をしたが、しばらくはだれも発言しなかった。それが暗黙の了解となつて、母も友達も承諾したことになつた。兄は気にながら準備して、三日後に出発した。

元山から汽車で南下した私たち家族は、四十三歳の母、十六歳の長女、十四歳で三男の私、十二歳の次女、十歳の三女、八歳の四男、五歳の五男、三歳の四女、赤ん坊の五女の計九人という大世帯だった。母は世話会に家族で南下することを告げて、世話になつたお礼を述べた。家族は各自がそれぞれ荷物をまとめ、不要なものは部屋の片隅にまとめて置いた。準備はできた。当時は日本人は元山駅からの乗車はできず、安辺駅で乗車するようになつていたので、朝鮮人駅員の指示で安辺駅まで歩いた。駅では朝鮮人が優先乗車した後、日

本人はまとめて乗車が許された。切符は不要になつてしまった。

車内での混雑には辟易した。みんな日本語を話さない。家族には、なるべく話はするな、するときは小声でしろ、と注意されていた。姉が赤ん坊を大事に抱いていた。子供たちも不安なのか、うつむいていた。いろいろと小さなトラブルはあったが、何とか鉄原駅に下車することができた。

ここからは歩くことになる。朝鮮人の案内を請い、近道を選んだ。かなり険しい山道だったが、途中では日本人もかなり歩いてきた。私たちのように準備してきた人は少なく、食べ物が無く弱っている人が多かった。母と姉は、交代で赤ん坊を背負って歩いた。子供も、それぞれ相応の荷物をリュックサックに詰めて背負った。赤ん坊より二つ上の妹は、足が弱いので時々おんぶした。小さい子には、この山越えは相当に応えたようだった。

何度も励まし、ときには脅かしもした。「歩か

ないなら置いて行くよ」と真顔になって言うのと、子供たちは必死になって歩いた。道端には子供連れの家族が休んでいたが、姉がその子供に食べ物とお金を少々あげていたようだった。そして、「大きい方の子は大丈夫と思うが、小さい方の子はどうかな」と言っていた。

お金は子供の洋服の中に縫い込んだり、骨壺の中にも隠した。この骨壺を、一番小さな男の子に持たせたが、日本に帰ったときに「僕がお父さんの骨を持って来た！」と自慢していた。

野宿したときの、朝鮮人の泥棒には手を焼いてしまった。油断をしていると、何でも盗んで行ってしまう。油断は禁物だった。また、途中で死骸を何体も見つめた。地獄とはこのような所かと思つた。ほかにも悲しいことが幾つもあった。悲惨なことがありすぎたが、思い出すこともいやである。

山の中で三泊した後、連川に到着。川を渡るには渡し船に乗らなければならないが、それには船賃が必要だった。何人かの日本人が、船を待つて

座り込んでいた。

やっと川を渡って南朝鮮に入った。そこには米軍がいて、頭から足の先まで真っ白になるほど殺虫剤をかけられた。これで虱は全滅か。虱には恨みがある。消毒を終えてやれやれと思いい、汽車に乗った。

子供たちは「もう歩かなくても良いの？ 脚が痛いよ。まだ日本は遠いの？ まだ歩かなくちゃいけないの？」などと口々に言っていた。「よく頑張った。みんな大丈夫か。ここからは汽車と船、また汽車だ。頑張ろう」と言って、母や姉は励ましていた。再び荷物を整理して、要らないものは捨ててしまい、子供たちのリュックサックを軽くした。

七 釜山から引揚船で博多へ

京城で下車すると思っていたが、そのまま釜山まで直行した。景観が一変した。空が広い。それに北朝鮮と違い山が低く、はげ山も多い。何よりも、暖かく気持ちいが快適だ。風がさわやかに吹い

ていた。各駅には、朝鮮人が食べ物や並べて売っていた。私たちはお金を多少準備してきたが、無銭の人が多く、母があの人に、姉がこの人にと、食べ物や分けたい。我が家族にも、心身に少しゆとりが出てきたようだった。

釜山から、会寧丸という引揚船に乗った。今日が何日だかよく分からなかった。五月の末かとは思っていた。博多に到着したが、船内で伝染病が発生。下船はかなり遅れた。船の食事には参った。出されたものしか口にすることができず、全員腹ぺこだった。

八 博多から故郷伊豆長岡へ

私は一度日本に来ていた。昭和十一年四月、五歳のときであった。当時は、清津から船で敦賀へ、そこからは汽車に乗った。朝鮮に帰るときも、この逆コース。九州は初めて目にする所であった。

博多駅から汽車に乗って、一路沼津へ向かったが、日本もひどいことになっていた。汽車の窓から見る限り、都市はほとんど焼野原だった。朝鮮

は部分的には空爆があったが、こんなひどいことはなかった。沼津も空爆で痛められていた。駅もバラック建てだった。遠くに海が見えた。

バスに乗って伊豆長岡町に向かった。バスの車掌が運賃の請求に来た。母が引揚者であることを告げ「無料ではないか」と聞いた。やりとりする声の方をバックミラーで見ていた運転手は、我々の姿があまりにも惨めなので声はなかった。姉が「お金はありますから払います」と言ったが、車掌は請求には来なかった。だれも言葉がない。

古奈という停留所で降り、温泉街を親子八人が、いや赤ん坊を入れると九人になる一群が、朝鮮から着たきり雀のままの姿で歩いているのを、町の人々の目には異様に映ったのだろう。好奇の目を向けていたが、私たちには何一つ恥ずかしいことはない。長い間苦勞に打ち勝ち、お互い助け合い、命を守った誇りさえある。ただ、これからの生活がどうなるのかは心配だった。姉は道順をよく覚えていて、「堤防を歩くか、それとも左に行くか

ね」と母に聞いていた。

九 伊豆長岡町での生活

母方のおばあさんの隠居所の家に入れてもらった。母の兄夫婦も元気でいた。この字（あざ）は全戸数五十戸余り、温泉の出る共同浴場を持ち、ほとんどが農家だった。母はここで育ち、兄たちも短い期間ながら、おばあさんと寝起きを共にし、食事と一緒に食べて、ここから学校に通っていたので、友達も多かった。よそ者扱いは全然感じなかった。食生活は全国的に貧しい時代だ。ここは田舎でしかも農家が多い所、食べ物豊富とは言えないが、北朝鮮のようなことはなく、もちろん生命の危険もない。

だが、おばあさんには迷惑を掛けた。六畳の畳の部屋が二部屋、土間が広く二十畳ぐらいあった。ほかに炊事場が付いていたが、おばあさんはこの土間を改良して五畳ぐらいの部屋を作り、そこで寝起きした。食事は母家から米、味噌その他をもらい、自炊していた。

長兄は静岡の郵便局に就職した。次兄は東京の会社にいたので引揚げの悲惨さは知らなかったが、戦争末期に東京で焼け出されて、ここに来ていた。この地に疎開していた会社の社長に頼んで、その会社に勤めて東京にいた。姉は、叔父さんの紹介で近くの旅館に勤めた。

私は親戚の建具屋に手伝いに行かされた。下の妹は千葉の叔母さんの家に行った。朝鮮で小学校に通っていた弟妹は、一年留年して学業に励んだ。母は農作業や旅館の仕事にも携わっていた。

元山の避難先で生まれた赤ん坊も、大きくなつた。祖母が一番かわいがっていて、母よりもだれよりも愛情を込めていたのに、運命とは酷なものだ。遠い異国で生まれ、親兄弟にしっかりと守られ、日本の地を踏んだのに、昭和二十四年十月に病気になる、遠い父の所へ行ってしまった。葬儀は、村の人たちの援助を受け、立派に執り行われた。

母が健在なとき、この子の話を始めた。子供が

祖母に「ばあちゃん、このわらじ破れたから、こそくってちょうだい！」（「こそくるとは当地方の方言「つくろう」）祖母が、わらじを見て「こんなに傷んだら、もう直すことはできない。ばあちゃんが、明日きれいなを作ってあげるから、今日は我慢して」と言った。母はこの話をしながら、子供の顔をしのび、昔を思い、懐かしんだのではないだろうか。祖母は、わらじを作るのが巧かった。この子のわらじも、祖母が作り与えたものだ。兄弟たちはそれぞれわらじを作ってもらい、重宝していた。

昭和三十八年ころ、長兄が静岡から沼津に転勤になり、テレビを取り付けた。祖母は相撲を見ていたが、「テレビに映っている人は、こちらのことが見えるのかな…。」兄は説明に困っていた。祖母は明治四（一八七一）年の生まれだ。東海道線がまだ走っていない時代である。兄は、祖母が好きなときにいつでもテレビが見られるように、ここだけ押せば良いと祖母の指を握って教え

ていたが、祖母はテレビに触れるのを嫌がっていた。

十 祖母、母、兄弟姉妹のその後

苦勞と世話をかけた祖母も、昭和三十九年八月に他界した。享年九十五歳だった。孫たちは、あだ名をマッカーサーと呼んでいた。兄は、遺影を抱えて参列した。私たちを育てくれ、世話になった家も、取り壊しの運命に遭い、私は取り壊しの手伝いをさせてもらった。何か胸に迫ってくるものがあった。私たちのお腹を楽しませてくれた、三本の柿の木もすっかり老木となり、小さな青い実が寂しかった。

次兄は昭和四十年、三島に度量衡計器の工場を建てた。私は、工場に勤務するために技術を身につけようと、東京のある工場に身を寄せた。やがて、三島の工場も順調に動き始めた。母もいろいろ手伝っていた。ほかの兄弟姉妹も結婚し、各自の生活を築いている。

次兄が東京から三島の工場に來ると、今夜はマ

ージャンをするからと、兄弟に召集を掛ける。熱海の弟は車で來るし、長兄は葦山の官舎からやってくる。男五人兄弟は、悪ふざけしながら始める。長兄は朝鮮の郵便局にいたときに覚えたようだ。経験は豊富だ。このときは、みんな元気で面白かった。母は夜食の支度をしていたが、一番楽しかったのではないだろうか。

昭和六十三年、世間の不況のあおりを受け、工場も閉鎖の憂き目に遭った。母は長兄の隣のマンションに移り、長兄が面倒を見ていた。ここでも兄弟が集まり、マージャンをやった。私はたび重なる病で薬漬けとなり、その副作用かだんだん目が悪くなり、今では盲目になってしまった。入院して、妻や子供に迷惑を掛けている。

すっかり屋で気の強かった母も、病には勝てず入院することになった。兄弟姉妹も交代で看病に努めたが虚しく、平成十(一九九八)年十月五日、他界した。祖母と同じく、享年九十五歳であった。

最近、四男の弟が熱海で他界した。この弟は異

質で、ほかの兄弟はだれも酒を飲まないのに、弟は酒を飲んだ。マージャンをやりながら、いつも飲んでいた。飲むと絡んでくるものだから母も嫌がっていたが、おかしなことに、母はそれでもお酒を常に買い置いていた。

ほかの兄弟は元気にやっている。避難先に一番手を焼いた妹も、既に六十三歳になった。平成十七年九月、母の七回忌を兄弟姉妹で執り行った。

今から六十一年前、清津、羅南、咸興、元山、その他北朝鮮の地で、無念の死を遂げられた方々の冥福を、心からお祈り申し上げます。

鉄原の山越えで先頭で指揮をとってくれた姉、当時のことが一番記憶にあるはずの姉が黙して語らなかつた。話すことのできない現実を見てしまったのか、話をしたがない。今はアメリカのロスアンゼルスに在住している。

北朝鮮の羅南から昭和二十年八月、避難民として放浪九カ月、たび重なる辛苦に耐え苦勞を分かち合い、心も着衣もぼろぼろで日本にたどり着いた

昭和二十一年六月、あれから六十一年が過ぎた。最近、清津師範学校の同級生で、市川市在住の神代一昭さんが訪ねて見えた。当時の話が出て、楽しくまた嬉しかった。

私は、現在静岡市の済生会病院にお世話になっている。長兄は、盲目の私の所に見舞いに来て、何回となく、北朝鮮の当時の避難のことをメモしてくれた。もう、私は断片しか覚えていない。

私の回顧録のようになってしまったが、戦争に負けて、惨状極まりない避難行をした苦勞を知ってもらい、平和がいかに大事かを考えてもらえれば、有り難いことである。